

# PC建協だより

## 各発注者との 意見交換会始まる



7月2日の内閣府沖縄総合事務局を皮切りに全国8国土交通省地方整備局と北海道開発局の合計10の発注者と意見交換会が行われます。8月末までの状況は中国地整・九州地整・四国地整・北陸地整・中部地整の6か所が終了しています。今後10月中旬にかけて残りの3地方整備局および北海道開発局と順次開催していく予定です。

国土交通省との意見交換会は、PC建協の取り組みについての報告とP

C建協からの提案を行い、地域に応じた内容を変えて行っていますが、概ね以下のような内容になっています。

PC建協からの報告  
PCの品質確保、既存ストックの長寿  
命化に向けての取り組み、広報活動  
教育現場への支援活動の取り組み、技  
能労働者の適正賃金水準の確保、社  
会保険未加入問題への対応等

### PC建協からの提案

- ①インフラ長寿命化への対応ーPCの専門技術力を効果的に活用ー
- ・橋梁長寿命化対策にPC建協が加わる検討会の設置を提案
- ・老朽化した鋼橋RC床版の効果的な対処方法の提案ー床版の全面取替えに有効なプレキャストPC床版の活用ー
- ②事業の効率的な執行に向けてーPC工事の特性と実態を踏まえてー
- ・多様化する入札制度への提案
- ー一括審査方式の採用の促進他
- ③若手技術者の育成ー魅力的な職場

## 第4回業務報告会 開催される



7月17日ホテルグランドアーク半蔵門において、第4回業務報告会を開催しました。この報告会は、「会員各社の共益の確保」を目的として、協会活動の成果を会員全体にフィードバックするため、実施しているものです。昨年に引き続き、支部や部会の活動を紹介するポスター展示、PC板等の模型展示も行いました。

- PC建協からは、
- ①PC橋の持続荷重の影響評価手法に関する共同研究委員会報告
- ②従来タイプA支承の継続利用に関する取り組み
- ③「技能労働者の処遇等に関する連絡会議」活動報告

④東北支部PC橋長寿命化委員会報告の4件を発表しました。

その後、一般社団法人橋梁調査会の大石龍太郎審議役から、道路橋の劣化事例から最新の点検技術の紹介等の特別講演がありました。



大石龍太郎審議役

参加者は、発注者をはじめ会員企業、賛助会員企業を含め、総勢172名となりました。

また、報告・特別講演とも参加者から多数の活発な質疑応答が交わされました。

## 現場見学会開催

各地でPC建協支部が主催者となつて大学、高専の学生を対象にした現場見学会が開催されました。このうち中国支部では、6月18日松江工業高等専門学校(環境・建設工学科)の2年生、3年生の約80名を対象とし、現場見学会を開催しました。

見学会は現場へ移動するバスの車中から始まり、学生たちにPC技術

- づくりー
- ・専任補助者制度を活用するため  
の提案
- ・若手技術者の育成促進のために  
「若手支援評価型(仮称)」の採用をー

## 平成26年度第2回 定時総会開催される



平成26年度第2回定時総会が、5月22日(木)アルカディア市ヶ谷私学会館において開催されました。則久会長は開会挨拶の中で、①保全・補修

について簡単な座学を行い、現場ではエレベーターで橋面まで上がり、箱桁内部も見学しました。

学生からは技術的な疑問はもとより、現場での生活に関すること等、様々な質問がありました。

箱桁内部では、前日に打設したコンクリートの硬化熱を手で感じ、PCケーブルの緊張作業が間近に見られる箇所もあり、貴重な体験になったようです。



## 現場見学会開催状況【実施済み】

支部名	開催日	現場名	対象者
東北	平成26年7月23日	多賀城地区上部工工事 高崎地区PC上部工工事	東北学院大学 工学部 環境工学科3年生 109名
関東	平成26年4月26日	SMCコンクリート橋 関東工場	日本大学 理工学部 土木工学科 14名
	平成26年7月22日	桶川第二高架橋	日本大学 理工学部 土木工学科 9名
北陸	平成26年5月20日	永平寺大野道橋 松岡高架橋	福井工業大学 建築生活環境学科3年生 16名
	平成26年8月6日	城山高架橋(その1~3)	金沢大学 理工学域デザイン学類3年生 90名
中部	平成26年5月10日	新東雲橋、本線1号橋	岐阜大学 工学部 社会基盤工学科 24名
中国	平成26年6月18日	多岐朝道路口田儀 第1高架橋	松江工業高等専門学校 環境・建設工学科2・3年生 80名



竹村公太郎氏

分野での活動強化等の観点から本部組織を見直し、新たに「保全補修委員会」を設置したこと。②本部・支部の一体となった活動をより積極的に推進する観点から「本部・支部連携事業」を新たに設けることにより引き続き新ビジョン2011の施策の推進を図ることを言明されました。総会においては平成25年度事業報告・決算報告及び役員改選について、承認されました。

総会終了後、竹村公太郎氏による「広重に見る日本のインフラ」と題する特別講演においては150名近い会員が熱心に聴講し、その後の懇親会においても、国土交通省足立技監を始め、総勢370名の参加をいただき、盛大に開催されました。



# たいふう

## 昔の人たちは台風を何と呼んでいたか？



室戸台風の記事見出しは「颶風」(大阪朝日新聞)

『源氏物語』や『枕草子』の台風の場面に「野分(のわき)」が使われているので、この言葉だと思っている人が多いのではないのでしょうか。

明治の初めまで、台風をあらわす日常用語としては「大風(おほかせ)」が一般的で、これを音読みした「大風(たいふう)」も使われていました。明治時代の理科学書や手紙の文例集に「野分」は見あたらず、この頃には和歌や俳句の世界の言葉になっていたようです。

明治22年に発行された『言海』には「野分: [野草ヲ吹キ分クル意] 冬秋ノ際ニ吹ク疾風(ハヤチ)ノ名。暴風」とあり、「木枯らし」を意味しているようにも思えます。そもそも、明治の人たちは低気圧の知識がありませんので、単に、風が強いという現象だけを見ているわけで、台風で野が荒れるのも、木枯らしで野が荒れるのも、同じだと思っていたのではないのでしょうか。

明治時代の航海術の解説書や理科学書には、「颶風(ぐふう)」が多く用いられています。他に「大風」「回旋暴風」「旋風」「サイクロン」などの名称も使われており、気象学の急激な進歩に当時の日本語が追いつかなかった様子がうかがえます。この颶風 jufeng は中国の言葉で、4方向から吹く風を意味しています。5世紀ころの記録にも載っており、中国では古くから台風を表す言葉として使われていました。

明治30年代に中央气象台(現在の気象庁)の岡田武松台長が「颱風(たいふう)」という言葉を使い始めてから、徐々に気象関係者の間で広まりました。この言葉を用いたのは、混乱していた気象用語の統一を図る意図があっ

たと思われます。しかし、この言葉はなかなか普及せず、一般に使われるようになったのは、昭和9年の室戸台風の後、マスコミで颱風と報じられるようになってからです。その後、昭和21年に当用漢字が制定され、旧字体の「颶」が廃止され、現在のように「台風(たいふう)」と表記されるようになりました。

颱風 taifeng は、17世紀末から福建省や台湾で使われるようになった言葉です。英語や中国語に音の似た言葉があったことから、颱風は「英語の typhoon」「中国の大風」「台湾方言の風節」から来た言葉といった様々な説を呼び起こすことになりました。

勢力の強い熱帯低気圧の呼び名は地域によって異なっており、北西太平洋や南シナ海では typhoon、北大西洋では hurricane、インド洋では cyclone と呼んでいます。hurricane はカリブ海の一本足の嵐の神ウラカンが語源、cyclone は英国の気象学者がギリシャ語の蛇から造った言葉です。

英語の typhoon は2種類の異なる東洋の言葉から誕生しています。

一つは、インド洋の航海記などで使用されるようになったもので、ウルドゥー語(ペルシャ語・アラビア語)で暴風雨・熱帯低気圧・竜巻を表す tufan から来ています。1588年に Touffon として最初に紹介され、これが次第に変化して typhoon になりました。tufan はアラビア語の tafa(回転)から来た言葉で、ギリシャ語の Typhon(100の頭を持ち炎を吐くギリシャ神話の怪物)とも関係しているのではないかと考えられています。

もう一つは、東シナ海の航海記などにあり、この地域で使われていた tai fung を紹介したものです。tai fung は広東方言で ta(大きい) feng(風)を意味しており、1699年に最初に紹介されたときは Tuffoon と綴られていました。

宋・元・明の時代には中国とイスラム世界との交易が盛んで、当時、世界最大級の港であった福建省の泉州を中心に、多くのイスラム商人がやって来て、定住した人も多かったようです。交易が盛んだった時代、ひとつの船に様々な国の人たちが乗る機会は多く、さらに、国境を意識しない海上生活者や海運関係者が多くいました。そのような交易に従事していた人たちが使っていた言葉が、ウルドゥー語の tufan や広東方言の大風 tai fung になり、少し時代を置いて、颱風 taifeng になったのではないのでしょうか。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 **松嶋 憲昭**

「夏休み特別企画!今しか見られない!巨大構造物の内側大公開」をキヤッチフレーズに8月9日、国道7号線「雄物大橋(L=394m、PC6径間連続箱桁橋、張出し架設)」で現場見学会を開催しました。主催は発注者の東北地整秋田河川国道事務所と施工者の(株)日本ピー・エス、後援は土木学会東北支部とPC建協東北支部です。



## 親子現場ツアーの開催

今回の見学会は、子供たちに普段は入れない施工中の橋の内側を見てもらう、土木に関心を持ってもらうことを目的に、現場近隣の日新小学校、勝平小学校5、6年生の親子14組32人の参加がありました。

参加者は、まず、対面の作業車へ仮橋を渡って移り、箱桁内を見学しました。日新小6年生の男子児童は「橋の中がこんなふうになっているなんて知らなかった。」と驚いた様子でした。普段見ることのできない箱桁内部や建設設備、PC鋼材などを記録に残そうと多くの参加者がカメラを構えていました。



その後、現場事務所に戻り、PC建協東北支部の委員による「コンクリートの橋」の説明の後は、実践とし



て、ゴムひもとボタンをPC鋼材と定着具に見立てた雄物大橋の約60分の1スケールの「ミニチュア模型」を製作しました。

「夏休みの思い出ができました。ありがとうございました。」という元気な声がありました。主催者からは、未来を担う子供たちに土木の魅力が少しは伝えることができただけではないか、私たちにしても子供たちの笑顔に癒される素敵な見学会となりましたとの感想がありました。

## PC工事技能者講習会

PC技能力向上と次世代への継承を目的としたPC工事技能実習(第4回)が7月8日から7月11日までの4日間、静岡県富士宮市の富士教育訓練センターで、計29名が参加して開催されました。

実習は緊張工、PCグラウト工と測量工の基本的知識について行われました。受講者にとっては、PC鋼材の破断状況の確認やデモンストラシヨニング実習、PCグラウト実物大試験体への



注入実習など貴重な経験を積み機会となりました。